歴史地震
第35号(2020) 15-30頁
受付日 2019/11/30, 受理日 2020/02/21

明治熊本地震における熊本城の被害

熊本市文化市民局熊本城総合事務所 熊本城調査研究センター* 木下 泰葉

Damage to the Kumamoto Castle by "the Meiji Kumamoto Earthquake"

Yasuha KINOSHITA

Kumamoto Castle Research Center, Tetorihoncho,Cyuo-ku,
Kumamoto, 860-8601 Japan

The Meiji Kumamoto Earthquake occurred on July 28, 1889. The Kumamoto Castle's stone walls and structures suffered serious damage by the earthquake, but the exact damage has not been known until now. The Kumamoto Castle was garrisoned by the 6th Division (Imperial Japanese Army) at that time, and the 6th Division restored stone walls which collapsed and damaged by the earthquake. This paper describes the detailed damage of the Kumamoto Castle and the process of the 6th Division's response after the earthquake, based on historical documents written by the army.
Keywords: the Meiji Kumamoto Earthquake, the Kumamoto Castle

§1. はじめに

江戸時代の城郭の修理については，従来より幕府の城郭政策と幕藩関係の観点から研究が進められており［城戸（1960）・藤井（1990）・白峰（1998）］，近年では江戸時代の地震による城郭の被害とその修復についても論じられるようになってきた［北原（2015），盆野（2016・2018）］.

一方，明治時代以降の城郭については，新政府が陸軍省管理の「存城」と大蔵省管理の「廃城」に振り分けた，いわゆる「廃城令」の研究が早くにあり［森山（1970）］，近年では陸軍による城郭の改変や，「廃城」となった城郭の民間による保存運動についての研究に関心が高まっている［独立行政法人奈良文化財研究所文化遺産部遺跡整備研究室（2017），城郭談話会（2019）］.

近代の城郭の地震被害の研究としては，名古屋城の例がある。1891年濃尾地震の被害を受けた名古屋城は，地震以前に陸軍省から宮内省への移管が内定していたことから，修復費用を陸軍省で負担し，工事を宮内省が行うこととなったが，その修理内容は震災復旧を名目とした，離宮としての使用を視野に入れた本丸御殿の根本的修理であったことが明らかにされた［朝比奈（2008）］. また，1882年に沖縄付近で発生した地震によって被災した首里城の石垣については，警備上・脱走兵の阻止・体裁・旧観に復すること・将来の風雨による被害拡大阻止・放置することによる修復費増加の阻止などの諸々の理由を挙げて，石垣の早期復旧に取り組もうとしたことが指摘されている［高田（2019）］. しかし，近代に発生した地震による城郭の被害の実態や，その復旧過程についての検討は，未だ不十分な状況にある.

1889 年（明治二十二年）に熊本地方で発生した熊本地震（以下，明治熊本地震）は，地震計による地震観測が開始されて以来，初めて都市部を襲った直下型の地震として知られており［秋吉・淵田（1998）］，熊本城も被害を受けた. 熊本県が作成した『明治廿二年熊本縣大震始末』（熊本県立図書館蔵）のほか，『熊本新聞』の発刊者でありジャーナリストであった水島貫之による『熊本明治震災日記』などの詳細な史料が残り，これまでに地震被害の全体像が明らかにされてきた［山中（1996），山中・新井田（2018）ほか］. しかし，熊本城の被害という面からみると，県政資料や新聞記事などで報じられた記述に依っており，被害の実態は明らかにされていなかった.

本稿では，陸軍の管理下に置かれた城郭の被災の事例として，明治熊本地震時の熊本城の被害に着目し，熊本城を管理した当事者である第六師団作成の史料に基づき，地震被害の実態把握と，陸軍による復旧予算の獲得に向けた動きを考察したい.

* 〒860-8601 熊本県熊本市中央区手取本町 1-1 kinoshita.yasuha@city.kumamoto.lg.jp

§2. 熊本城の概要

熊本城は，熊本県熊本市の中央に位置する平山城である． 1588 年（天正十六年）に加藤清正が肥後半国の領主として，中世以来の城であった隈本城に入城し，石垣・堀・天守などの建造物の整備を行ったが，1599 年（慶長四年）頃には新たに茶臼山全体を取り込むように「新城」の築城を進め，1600 年（慶長五年）には大天守が建築された．1607 年（慶長十二年）には本丸域が完成し，この時期に「隈本」から「熊本」に地名を改めたとされている．1632 年（寛永九年）に加藤家が改易となり，同年 12 月に細川忠利が藩主として入城し，明治維新まで細川家が城を維持した．加藤時代・細川時代ともに地震による被害を受けたほか，大雨や洪水などによる被災も度々生じ，その都度修復を受けている［嘉村・他（2019）］．

1871 年（明治四年）に全国に 4 鎮台の設置が決定されると，九州・中国地方を管轄する鎮西鎮台の本営が熊本に置かれ，熊本城は兵部省（1872 年に陸軍省と海軍省に改組）の所管となった．1873 年 1 月 9 日，旧来の 4 鎮台に名古屋・広島を加えて 6 鎮台とし，鎮西鎮台は熊本鎮台と改称した．同年，いわゆる「廃城令」と呼ばれる太政官達で，全国の城郭を陸軍省管轄の「存城」と大蔵省管轄の「廃城」に分け，熊本城は「存城」として陸軍省に所管されることとなる．

当初，鎮西鎮台は熊本城の南の旧藩邸花畑屋敷に本営を置いていた．その後，1874 年には旧花畑屋敷から本丸へ熊本鎮台本営が移った．陸軍の管理下に置かれた熊本城では，櫓の解体や石垣の一部撤去等の改変が行われ，城内各所に兵営や倉庫，病院が建築されることになる．1877 年，西南戦争開戦直前の火災で天守・本丸御殿一帯を焼失し，戦後には天守台前に鎮台司令部が建築された．

1888 年 5 月に師団司令部条例が制定され，熊本鎮台は第六師団に改編された．第六師団は，熊本の第十一旅団と小倉の第十二旅団からなり，第十一旅団は歩兵第十三連隊，歩兵第二十三連隊，騎兵第六大隊，砲兵第六大隊，工兵第六大隊，輜重兵第六大隊で編成されていた．熊本城一帯には，本丸に師団司令部，二の丸に歩兵第十三連隊と歩兵第二十三連隊第三大隊，桜馬場に砲兵第六大隊，古京町に輜重第六大隊，古城に熊本衛戍病院，藤崎台に漆畑射的場，山崎に歩兵第二十三連隊が置かれ，さらに山崎練兵場の広大な軍用地が広がっていた（図 1）．

図 1 1889 年の熊本城周辺図．
（熊本市歴史文書資料室所蔵『熊本第 6 号地図』）
Fig. 1 Map of the area around the Kumamoto Catsle
(”Kumamoto Area Map No. 6” owned by Kumamoto City Historical Documents Library)

§3. 明治熊本地震の概要と第六師団の対応の経過

明治熊本地震は，1889 年 7 月 28 日 23 時 40 分前後に熊本地方で発生した直下型地震である［山中（1996）］．マグニチュードは 6．3 と推定され［地震調査研究推進本部地震調査委員会（2009）］，震源は熊本市西方の金峰山付近とされることから，「金峰山地震」とも別称されている．熊本県内では死者 21 名，家屋全壊 234 棟，半壊 229 棟の被害があった［山中（1996）］．

地震発生からの経過を表 1 にまとめた．発災翌日の 29 日の午後 3 時には，熊本城の石垣と兵営の被害について，第六師団監督部長井出正章から陸軍大臣大山巌宛の第一報が陸軍省において受信された．なお，29 日午前 7 時 0 分に第六師団長山地元治より陸軍大臣大山巌へ，地震の第一報が発信されたが，「音信輻輳遅延ス」とあり，陸軍省で受信されたのは 7 月 30 日午前 7 時 30 分であった．さらに，31 日に井出監督部長より大山陸軍大臣へ出された震災損害届では「当城内石垣或ハ岸等数ヶ所壊崩，各官衛各兵営及兵器弾薬庫其他官舎諸建物等損害少カ

ラズ」とあり，被害の概況をまとめた別冊が提出されている．この時，石垣被害の原因として地震の揺れの大きさとともに，1877 年の西南戦争時の火災による土石の被熱と，6 月以来続いていた降雨の影響を挙げている．土石の被熱については，特に火災の激しかった天守・本丸御殿一帯の石垣で，表面が玉ねぎ状に剥離した石材を，現在でも確認することができる。

地震の翌々日である 7 月 30 日には，明治天皇の侍従である富小路敬直と非職侍従である荻昌吉の熊本・福岡両県派遣が決定し，8 月 1 日に両侍従は東京を出発，6 日午前 8 時に熊本県三角港に着船し，午後には熊本県庁・第六師団を訪問し被害状況を視察した．侍従らは 7 日に被害の大きかった熊本市近郊を視察し，8 日に玉名郡高瀬町を視察後，福岡県に移動して各地の被害状況を視察して，12 日に長崎港を出発し 18 日に東京に帰着した．

なお，侍従らの熊本視察中に，熊本縣知事富岡敬明は「震災景況書一冊」・「管内被害図一葉」・「被害地写真拾葉」・「震動度数表一葉」・「管内報告一冊」を渡したが，いずれも慌ただしいなか取り調べたもので完全なものではなかったので，その後に追加調査を行い，侍従らの帰京前日の 11 日，長崎港に職員を派遣して，7 月 28 日から 8 月 5 日までの景況書及び被害図・写真を手渡したことが『明治廿二年熊本縣大震始末』に記されている．その写真とは，8 月 11 日付の『九州日日新聞』によると「高瀬川船住居の景，高橋町字川端破屋の景，監獄破塀の景，瀬戸坂潰れ家の景，瀬戸坂崩崖の景，細工町五丁目及ひ唐人町の仮小屋住居の景，第六師団内四個所等」の計 11 枚であった．

『明治廿二年熊本縣大震始末』によると，その後熊本県では新たに 11 枚の写真を撮影し，職員を上京させ増写した写真を侍従と内務省に提出した．また，侍従には 8 月 11 日に渡された 11 枚と，増写された 11 枚を合わせた計 22 枚を 1 通りとして，9 通りの写真が同時に贈られているが，これは長崎港において県職員の若林に命じていたようである．これらの写真は侍従より明治天皇に進上されたと考えられるが，現在宮内庁に所蔵される明治・大正時代御手許写真のなかに，明治熊本地震に関連する写真は確認されていない［白石(2016)］．

なお，侍従に提出された写真との関連は不明だが，国立科学博物館には「旧熊本城闇ガリ　第六師団本部石垣崩壊之景」・「旧熊本城飯田丸　第六師団弾薬庫上石垣崩壊之景」・「旧熊本城西出丸　第六師団火薬庫崩壊之景」・「旧熊本城平左衛門櫓床　第六師団号砲台裂地之景」・「熊本市唐人町仮小屋之景」・「熊本市細工町仮小屋之景」・「熊本監獄内土塀崩壊之景」・「熊本市大字東坪井見性寺境内墓碑顛倒之景」・「飽田郡高橋町負傷者船住居之景」・「飽田郡高橋町字川端家屋崩壊之景」・「飽田郡芳野村大字野出馬ノコーネ裂地之景」計 11 枚の写真が所蔵されている［室谷・他(2016)］．

国立科学博物館に所蔵されるいずれの写真も，貼り付けられた台紙の裏に「熊本地震二十枚之一　理科大学地震学教室」と注記があり，地震発生後に調査のため熊本を訪れた帝国大学理科大学の小藤文次郎や関谷清景，長岡半太郎らが入手した写真の可能性も考えられる．当時の新聞記事や市民の動向を水島貫之がまとめた『熊本明治震災日記』には，「旧熊本城西出丸　第六師団火薬庫崩壊之景」と「熊本市大字東坪井見性寺境内墓碑顛倒之景」の 2 枚の写真と全く同じ構図でスケッチしたものが掲載されているので，明治熊本地震の被害を伝えるものとして広く出回っていたのかもしれない．

一方，第六師団の被害の詳細が一般市民に広く伝えられたのは 8 月 4 日付の新聞朝刊各紙で，内容は以下の通りである．（史料中，〇は新聞の表記のまま）

【史料1】8 月 4 日付『九州日日新聞』

師団内の破損

去る二十八日の大地震にて当師団内の破損せしヶ所，周壁及屋上瓦破損並に基礎動揺或は湾曲せしもの百五十棟〇玄関及家屋転倒せし者十五棟〇玄関及家屋半倒せしもの五十一棟〇土蔵にして第一項の如く破損を生せしもの二十棟〇煉化石造にして前同断に係るもの二棟〇柵矢来傾きたるもの（四百六十八間）同転倒せしもの（百二十二間）〇土塀倒傾に係るもの（百三十五間）〇井戸及家形共大破に係るもの（二十ヶ処）〇下水及築石崩壊に係るもの（百四坪）〇同孕出したるもの（百五十五間）〇土塁及崖並に的阜共破壊せしもの立坪（百八十五坪）〇通用門大破に係るもの（三ヶ所）同損（一ヶ所）〇埋葬地墓標折倒せしもの（七十六）〇城内石垣崩壊（二十九ヶ所）平坪凡八百二十坪〇同孕み出し十四ヶ所平地四百五十坪〇崖崩壊五ヶ所三百六十坪

これによると，熊本城内では石垣崩壊 29 か所 820 坪，石垣孕み出し 14 か所 450 坪，崖崩壊 5 か所 360

坪の被害となっている．なお，『明治廿二年熊本縣大震始末』のうち，「官衙被害表」も同様の数字である．少なくとも新聞に掲載される8月4日までのいずれかの時期に，師団から被害の公式発表があったものと考えられる．しかし，これらの史料には石垣被害の具体的箇所はなく，29か所の個々の被害規模も把握できない．

以下，第六師団によって正式な被害報告書としてまとめられたと考えられる『震災ニ関スル諸報告』から被害の実態を見ていく．

§4. 『震災ニ関スル諸報告』にみる熊本城の被害

4. 1『震災ニ関スル諸報告』の性格

『震災ニ関スル諸報告』(以下，『諸報告』と略記)は，明治天皇御手許書類に含まれる．明治天皇御手許書類とは，その名の通り，明治天皇の御手許に上げられた書類で，侍従職で保管されていたものである［白石(2015)］．

『諸報告』は 17 点の史料を合綴したもので，その内訳は表2の通りである．冒頭に第六師団軍医部による負傷者等の報告があり，続けて衛戍病院による地震前後の気圧と地下水の変位調査表・各部隊の負傷人員・機械の破損取調表・損失薬物取調表が続いている．第六師団監督部による「明治二十二年七月二十八日午後十一時三十五分震災破損所概調書」が本史料のうちで最も丁数が多く，各部隊の建物や所管地の被害を記している．この中には，第六師団が管理する熊本城の石垣及び櫓等の建築物の被害が記されている．さらに「震災破損所概調書付録」が付随し，石垣や崖の被害の詳細が記されている．この付録の末尾に綴じられた「熊本城　千弐百分一図」(図 2)は，「震災破損所概調書付録」の 69 か所に及ぶ破損箇所を図に示したもので，「石垣及崖破壊」を赤色，「石垣孕ミ出シ」を黄色で塗り分けている．

現在は一冊に合綴されている本史料だが，1930年の『明治天皇内廷御書類目録』によると，「侍従萬里小路通房熊本福岡両縣下震災及水害取調書類」の項に「震災ニ関スル諸報告」「明治廿二年七月廿八日午後十一時三十五分震災破損所概調書」「震災破損所概調書付録」とある．侍従名が萬里小路通房とあるが，1889年の明治熊本地震で派遣された侍従は富小路敬直であることは確実なので，この部分は作成者の誤記であろう．

本史料の記述によると，1930年当時には3点に分かれていたことが確認でき，これ以降に合綴されて 1 冊になったとみえる．表2の1～15までは，古い四つ目綴の痕跡とみられる綴じ孔が残っていることから，これらが当初の「震災ニ関スル諸報告」の形であろう．「明治二十二年七月二十八日午後十一時三十五分震災破損所概調書」と「震災破損所概調書付録」は裏表紙にそれぞれ「第六師団監督部之印」の割印があることから，それぞれ別冊として仕立てて提出され，1930 年以降に「震災ニ関スル諸報告」の後ろに付けて綴じ直されたと考えられる．いずれにせよ，3 点とも1889年の侍従派遣時に提出されたものと考えて良いだろう．

続いて『諸報告』を構成している史料の作成日だが，綴じられている史料のうち最も古い日付は8月1日付の熊本衛戍病院による報告で，最も新しい日付は 8 月 7 日付の第六師団軍医部による報告である．少なくとも7月28日深夜の地震発生から，4日後の8月1日までには，各部隊に対し被害報告をまとめる指示がなされ，その後1週間程で急ぎ作成されたものとみられる．

両侍従は8月6日に三角港に着くと，午後には熊本城の第六師団を視察しているが，『諸報告』には 8 月7日の日付を持つものも含まれており，視察の最中にも被害内容の調査が行われていたことが窺える．8月17日付で第六師団監督部長井出正章から陸軍省総務局第一課清水俊宛に「富小路侍従過日当地巡視之節，別紙之通差出置候」とあり，「別紙」が『諸報告』にあたるとすれば，侍従が東京に向けて出発する8月12日までの時点で手渡されたと考えられる．

その後，帰京した侍従らは『諸報告』を手に明治天皇へ視察の復命を行ったと考えられ，その結果「明治天皇御手許書類」として保管されたのであろう．

4. 2 熊本城の被害

『諸報告』の「明治廿二年七月廿八日午後十一時三十五分震災破損所概調書」にまとめられた，熊本城の被害の詳細を見ていく．本史料は第六師団が所管する土地・建物の被害を記しており，師団司令部・監督部及外官・軍法会議・嶽ノ丸・西出丸・千葉城及調馬厩・衛戍病院・衛戍監獄・輜重廠・城内石垣・戸坂村避病舎・漆畑小銃射的場・小峰埋葬地・花岡山埋葬地・古城・歩兵第十三聯隊・歩兵第廿三聯隊・歩兵第廿三聯隊第三大隊・野戦砲兵第六聯隊・工兵第六大隊・輜重兵第六大隊・将校官舎の項に分けて記述される．

このうち，城郭建築物の被害としては，師団司令部

の項に「宇土櫓並ニ続櫓内外壁凡拾八坪破損及入口壱ヶ所石垣ト共ニ破壊」とある．また，歩兵第廿三聯隊第三大隊の項に「櫓外壁拾坪破損」とあるのは監物櫓で，「嶽ノ丸」で内外壁破損の被害を受けている5棟の櫓が，東竹の丸に現存する重要文化財建造物の櫓群と推定される．現在の曲輪の呼称と重要文化財建造物の位置を図3に示した．現存する東竹の丸の櫓は，田子櫓・七間櫓・十四間櫓・四間櫓・源之進櫓・東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓・平櫓の9棟と，櫓門である不開門 1 棟であるが，史料中には「櫓壱棟」と破損した壁の坪数のみしか記されないため，いずれの櫓が被災したものか，特定には至らなかった．

一方，城内石垣と崖については「一，石垣破壊　千弐百六拾壱坪弐合　一，石垣孕ミ出シ　千四百拾八坪四合　一，崖破壊　三百八拾三坪　但詳細ハ付録ニアリ」とある．「震災破損所概調書付録」では，「壱号　石垣破壊　凡長二十間，高五間　百坪」といったように1から69まで番号を付し，被害の状況とその規模を詳細に記す．末尾に綴じられた被害図「熊本城千弐百分一」では石垣や崖の被害が生じた部分を着色して算用数字を付し，69 か所の被害の位置を正確に知ることができる(図2)．「震災破損所概調書付録」と「熊本城　千弐百分一」で記される石垣と崖の被害の計 69 か所の詳細を示すと表3のようになる．「石垣崩壊」が42か所1261坪2合(4161．96㎡)，「石垣孕ミ出シ」が20か所1418坪4合(4680．72㎡)，「崖崩壊」が7か所383坪(1263．9㎡)であった．また，「付録」の最後には備考として「此調書中石垣孕ミ出シ其最モ著シキモノヲ揚ク，其他些少ノヶ所ハ此ヲ略ス」とあり，実際にはこれより多くの箇所が孕み出しの状態にあったと考えられる．

続いて，「明治廿二年七月廿八日午後十一時三十五分震災破損所概調書」と「震災破損所概調書付録」・「熊本城　千弐百分一」の作成日について，具体的な被害から検討する．国立科学博物館に所蔵される被害写真 11 枚のうち「旧熊本城西出丸　第六師団火薬庫崩壊之景」(図 4)で写された石垣は，現在奉行丸と呼んでいる曲輪の南面にあたる．この場所は「熊本城　千弐百分一」で「37」の番号が付され，黄色く着色された「石垣破壊」の状態であり(図5)，その石垣の被害規模は幅14間(約25.2m)，高さ6間(約10.8m)であった．写真からは崩落した石材が山になっていて判別し難いが，高さ 10mの石垣の天端から中央付近を超えて大きく崩落しているのが確認できるため，『諸報告』に記載される数値は実際の被害規模に近いものであると理解できる．

この場所について，8月3日の午前10時45分に，第六師団の井出監督部長より大山陸軍大臣へ，以下の電報が発せられた．

【史料2】

熊本　井出監督部長

陸軍大臣

今午前二時十分震動強ク，為メニ武庫・火薬庫ニ応用セル城内西出丸ニ在ル十間ニ三間ノ櫓一棟，石垣ト共ニ崩潰セリ，右石垣櫓共崩潰ノ懸念アルヲ以テ火薬ハ仮小屋ヲ設ケ，前日之レニ移シタルニ依リ損害ナシ，尤モ砲兵隊ヨリ預リノ大小榴弾ノ火薬，慥カニ分カラザレドモ，凡ソ四五十斤程損害セシ趣キナリ

明治廿二年八月三日

この電報によると，第六師団は旧藩時代の櫓を武庫・火薬庫に転用しており，28 日の地震により崩壊の危険があったため，中の火薬は 2 日までに運び出していたものの，3 日の余震で櫓は石垣とともに崩落したと分かる．櫓については，「明治廿二年七月廿八日午後十一時三十五分震災破損所概調書」の「西出丸」の項には，28 日の余震によるものという記載はないが，「火薬庫仮用ノ櫓石垣ト共ニ破壊」とあり，電報の内容と一致する．さらに，写真(図 4)にも崩落した石垣とともに，倒壊した櫓と思われる部材が写っているのが確認できる．

以上から，8 月 3 日の余震で熊本城の被害が拡大したことが明らかであり，8月4日付の新聞各紙で報じられた城内石垣崩壊 29 か所 820 坪，石垣孕み出し14か所450坪，崖崩壊5か所360坪の数値は，おそらく3日の余震発生前の調査によるものであろう．「明治廿二年七月廿八日午後十一時三十五分震災破損所概調書」及び「震災破損所概調書付録」・「熊本城千弐百分一」は，7月28日の地震の被害に限らず，3日の余震による被害の拡大も含んだ，一連の被害の報告書として作成され，富小路・荻両侍従が帰京する8月12日までに完成させて提出したと考えられる．

§5．第六師団による復旧予算獲得の経過

被害報告後，第六師団は所管する熊本城及び兵営の復旧に取り掛かる．第六師団による復旧予算の獲得をみる前に，会計を管掌した監督部について概要を述べる．

そもそも，師団とは独立して作戦行動がとれるよう主要な兵科を揃えた戦略部隊で，平時に常備的に編制された部隊としては最大のものであった．そのため，作戦行動を指揮する師団司令部には，軍政を管掌する陸軍省と軍令を管掌する参謀本部の出先機関としての役割が備えられていた．1888 年の師団司令部条例（勅令第 27 号）によると，師団司令部は参謀部・副官部・法官部・監督部・軍医部・獣医部から成っていた．なお，会計を司る監督部は師団長に属さず，陸軍大臣の直属とされた［大江（2018）］．

第六師団は復旧にあたり，まず 8 月 19 日に監督部長井出正章が陸軍大臣大山巌に以下の伺いを提出した．（史料中，割注は原文のまま）

【史料 3】

城郭修築保存之義ニ付申伺請

当熊本城ハ，肥後守加藤氏慶長六年或ハ四年築城之土工ヲ起シ，同十二年竣工，菊池ノ一族ノ出田秀信ナルモノ八十町ヲ領シ，始メテ熊本ニ在城ス，今ノ千葉城ト言フ，大永・享禄ノ頃鹿子木親員ナルモノ龍田郡山本郡ノ内百五十六町ヲ領シ在城スト雖モ，城郭狭少ナル故，改テ今ノ古城ニ築城セシト，佐々成政・加藤清正モ又此ニアリシトスト国誌ニ見タリ，今ヲ距ル弐百八拾余年間，城郭垣壁等風雨震災ニ今回ノ如キ大破壊落セシヲ聞カス，実ニ堅城ト言フベシ，然ルニ去ル十年ノ役兵火ニ罹リ有名ナル天主楼閣一烟ノ焦土トナリ，僅々宇土櫓及渡リ櫓ノ二三ヲ残スノミ，此カ為メ堅固塁垣ノ土石皆火害ニ罹リ，一トシテ原質ヲ存スルナク，常ニ破壊ヲ見ル，尚歳月ヲ経過スルニ随ヒ，自然旧跡ヲ失フノ慮少ナカラス，永々保存ニ苦慮セシ折柄，去月二十八日夜，震災ノ為メ大破壊ヲ生セリ，又現ニ破壊セサル所モ或ハ孕ミ出シ，或ハ地裂等頗ル多ク，此後激震一度来レハ過半壊崩ヲ免レス，幸ニ震災止モ風雨アル毎ニ漸次破壊スルハ眼前ニアリ，今回破壊所及夫レニ連繋スル修築費用，概算金七万三千五百餘円ヲ要ス，況ヤ全郭保存修築ノ費額ハ又巨額ニ到ラン，熟考ニ，我国有名ノ城郭殊ニ十年ノ役ニ在テハ，我ニ幾倍ナル大敵ニ囲マレ，数周間ノ防戦終ニ敵ヲシテ一歩モ城内ニ入レサリシハ，素ヨリ長官ノ方略・将校以下勇憤防戦ノ功ニアリト雖モ，加藤氏築城ノ計画又大ナルベシ，今ニシテ保存費額ノ為メ名城ノ旧跡ヲ失フハ遺憾限リナシ，依テ目下急務ノ修築費用別途御下附ノ上，尚後来保存修築ノ御計画有之度，至急何分之御指揮有之度候也

尚々此度震災ニ罹ル修築費用概算並ニ損所絵図面相添候也

明治二十二年八月十九日

第六師団監督部長井出正章（印）

陸軍大臣伯爵大山巌殿

本史料によると，熊本城は加藤清正の築城以来堅城を誇り，1877 年の西南戦争では天守などを焼失，堅固な石垣も火災の熱を受け保存に苦慮していたところ，地震を受けて大破壊を生じた．今回の破損箇所とそれに関連する修築費用は概算すると 7 万 3500 余円で，城郭全体の保存修築の費用は巨額になるだろうと述べている．しかし井出は続けて，熊本城は「我国有名ノ城郭」で，特に西南戦争においては幾倍もの敵に囲まれながらも数週間の防戦の結果，敵を一歩も城内に入れなかったことを述べ，この功績は当時の長官・将校以下の奮戦もあるが，加藤清正の築城の計画もまた大きかったと強調し，保存費用が高額になることで「名城ノ旧跡ヲ失フハ遺憾限リナシ」と強く主張した．そして，急ぎ修築費用を別途下附のうえ，保存修築の計画立案を願った．

ここで，第六師団が熊本城を「名城」として認識していたことは特筆すべきであろう．1871 年に熊本に鎮台が置かれて以降，熊本城を近代の要塞として利用するため，陸軍は様々な改変を行った．そのなかには，石垣の大規模な撤去も含まれていた．しかし，1877 年に置きた日本国内での最大かつ最後の内戦である西南戦争において，50 日あまりに及ぶ籠城戦を耐えて政府を勝利に導いた熊本城は，のちに陸軍の歴史において重要な場所として認識されたばかりでなく，加藤清正による築城技術も改めて評価されることになった．そして明治熊本地震で被災すると，「名城ノ旧跡」の保存を理由に巨額の修理費用を願ったのである．

さらに 8 月 23 日付で井出監督部長は大山陸軍大臣に対し，「各官署各兵営及病院，兵器弾薬庫，其外臨時修繕ノ費用」として 2 万 6213 円 90 銭を要求した．また，同日には震災の急場の費用として，経常費から繰り替えた金額が，前述の修築費の他に 1470 余円に上り，今後臨時支出が認められるまでに若干の費用を要するであろうと述べている．

その後，9 月 10 日には陸軍省会計局より大蔵大臣へ，以下の協議案が提出された．

【史料 4】

大蔵大臣へ御協議案

去ル七月廿八日，熊本地方激震地盤壊裂等之為メ，熊本城石垣及建物等大ニ損害ヲ蒙リ，就中城郭石垣之如キハ壊崩又ハ孕ミ出シ等数ヶ所ニシテ，建物之

如キモ又総而損害ヲ蒙サルハナク，然ルニ該石垣ヨリ修築セサレハ建物ノ修繕着手難致部分モ有之，何レモ難擱工事ニシテ，之カ修繕費金拾万七千五百八拾三円三拾九銭ノ多額ヲ要シ候処，定額常費ニアリテハ素ヨリ夫々須要ノ科目ニ応シ配当有之候義ニ付，如此臨時ニ係ル金員支出之途無之，目下修築等ニ差支候付，臨時別途下付之義，至急詮議相成度，別紙計算書相添及協議候也

本史料では，石垣を修築しなければ建物の修繕に着手できないとして，石垣と建物の修繕費として10万7583 円 39 銭を要するため，臨時支出を至急詮議して欲しいと述べている．これに続けて記載されている，大蔵大臣松方正義から大山陸軍大臣への回答は，以下の通りである．

【史料 5】
熊本城石垣及建物震災之為メ破損ニ付該改修築之為増額之儀，送甲第一六六三号ヲ以テ協議之趣了承，然ル処各地方水害等之為メ国費多端之折柄ニ付，石垣改築ハ漸次経費内ヲ以テ支弁スヘキモノトシ，兵営厩舎修繕トメ請求之金額三万四千三拾弐円八拾五銭丈可応来意候条，建物修繕ニ伴ヒ差向石垣之改修ヲ案スルにハ，此内より処弁之事ニ計画相成度，此段及回答候也
明治廿二年九月廿六日
大蔵大臣伯爵松方正義(印)
陸軍大臣伯爵大山巌殿
追テ本文増額之計算書ハ，式ニ拠リ更ニ御差出被成度，此旨申添候也

これによると，国内各地の水害のため国費がかさんでおり，石垣の修理は漸次経常費から支出すべしとした．そして，要求した金額については，「兵営厩舎修繕」として 3 万 4030 円 85 銭だけ応じ，建物の修繕に伴って石垣を修理する場合は，このなかから支出するよう計画されたいと回答している．

一方，8 月 19 日付で修築費用として要求した 7 万 3500 余円については，12 月 9 日付で「伺之趣，本年度ニ於テ金九千七百八十七円五拾弐銭六厘増額候条，該金額ヲ以テ緊急ノ修繕ヲ為シ，其他ハ可成節約ヲ旨トシ費用取調更ニ伺出ヘシ」と回答された．12 月 4 日付で石垣の修理に要する費用については，会計局の供用金から増額する旨通達されているのが確認できるが，具体的な金額は不明である．

これらについて『明治二十二年度陸軍経費一覧表』から作成した第六師団の経費の一覧が，表4である．これによると，1889 年の経常予算のうち 4 月から 9 月の営繕費の予算額は 7 万 9810 円 32 銭 9 厘であるが，10 月から 12 月の予算額は 9 万 719 円 95 銭となり，1 万 909 円 62 銭 1 厘の増額となっている．さらに臨時歳出として，史料 5 で回答されていた「熊本兵営廨舎震災修繕」として，3 万 4030 円 85 銭が計上されていることが分かる．

以上，第六師団は熊本城の修復にあたり，陸軍大臣及び大蔵大臣と協議を重ね，経常歳出の増額，または臨時歳出において予算を獲得した．『明治二十二年度歳計決算報告書』のうち臨時歳出には「熊本兵営廨舎震災修繕」の項目が確認できるが，その後の年度には見られないので，経常歳出の営繕費や新営費といった項目から修復に必要な費用が支出されたと考えられる．

例えば，1890 年 6 月 24 日に第六師団監督部長吉澤直行より大山陸軍大臣に提出された伺によると，明治 23 年度の第六師団所管の予算のうち，新営費は 3136 円 75 銭であった．実際に工事に着手すると，前年の地震により，石垣や崖崩壊だけでなく，地盤に破損を生じている箇所も多く，さらに移転改築する建物の部材のなかには破損腐朽したものもあったため，地盤工事や新材への取り替えを行ったところ予算額に不足を生じた．一方，熊本輜重倉庫 1 棟の新築予算は 5118 円 1 円 30 銭であったが，競争入札の結果 1357 円 30 銭の残余が生じたため，これをもって新営の不足を補填するとある．地震によって被害を受けた地盤の復旧は，建物の建築に伴って行われたために新営費が充てられ，さらに不足分は倉庫の新築費の残額から流用している事例として注目できる．

その後，明治熊本地震で被災した熊本城の復旧完了時期は明確ではない．しかし，冨重写真所には 1894～95 年頃の撮影とみられる 7，8 枚の原板が所蔵されている[熊本県教育委員会(1999)]．これらの写真はいずれも建物や石垣を写しており，石垣は積み直された箇所の石材が白いことから，竣工間もない頃で，復旧工事の完了を記録したものと明らかにされている[熊本城調査研究センター(2019)]．撮影箇所は天守台や闇り通路，宇土櫓などの本丸域に限られるので，少なくとも 1895 年までには師団司令部の置かれていた本丸の石垣・建物の復旧は完了したと考えられる．

§6. おわりに

第六師団作成の史料に基づき，明治熊本地震による熊本城の被害を詳細に調べた．従来，新聞記事等に基づいた崩落 29 か所，孕み出し 14 か所，崖崩壊 5 か所の数字が熊本城の被害として広く認識されてきたが，実際には石垣崩壊 42 か所，石垣孕み出し 20 か所，崖崩壊 7 か所であり，石垣の被害だけでも 8842．68 ㎡に及んだことが明らかとなった．また，これらの被害報告数の差については，8 月 3 日早朝の余震による被害拡大を指摘した．そして，このような甚大な被害を受けた熊本城を管轄する第六師団が「名城ノ旧跡」を保つべく予算獲得に奔走し，経常費の増額と臨時歳出をもって復旧にあたったことを明らかにした．

なお，本稿では第六師団の修復費用の獲得の経過を把握するに留まり，実際にどのような技術を用いて石垣等の復旧が行われたのかを明らかにすることはできなかった．第六師団による明治熊本地震後の石垣の復旧については，江戸時代のものと比べて小さい方形の石材を使用し，横目地の通りやすい積み方で修復されていることなどが指摘されている［熊本市・熊本日日新聞社（2019）］．こうした技術は，陣地の構築や築城などの技術的任務を担った工兵の手によるものか，軍が発注する石工の技術によるものかは今後検討の余地がある．これに関連して，1889 年 10 月 2 日付の『熊本新聞』に興味深い記述がある．新聞記事には，石垣の修理にあたり旧来の石材小分けにして積むならばともかく，そのまま用いて積み直すならば，大石のため到底大概の人夫ではできる者がいないので請け負う石工がいないという噂があり，これに対し師団は「無根の風説」で請負を申し込む者もいるが指名に至っていないだけであると回答したと記している．当時の石工らの間では，小型の石材を用いて積む技術が主流であったことを示す例として，今後検討する必要があるだろう．

本稿で扱った明治熊本地震は，平成 28 年（2016 年）熊本地震の発生以前に，熊本城が経験した地震の中で，最も詳細に被害を把握できる地震である．これらの被害箇所は平成 28 年の熊本地震でも重複して被災した場所もあれば，全く被害を受けなかった場所もあり，さらに明治熊本地震では被災せず今回の地震で新たに被災した場所もある．地震による石垣の崩落原因の解明に向けては、今後，さらに両地震の詳細な比較検討が必要である．

謝辞

『震災ニ関スル諸報告』の存在をご教示いただいた宮内庁書陵部白石烈氏，ならびに熊本大学文学部三澤純氏に深く感謝申し上げます．また，史料を所蔵される関係機関の皆様には，閲覧および図版の掲載にあたり格別のご配慮を賜りました．最後に，匿名の査読者のお二人には，有益なご助言をいただき，本稿を改善することができました。記して御礼申し上げます。

対象地震：1889 年明治熊本地震

文 献

秋吉卓・淵田邦彦，1998，熊本地震（1889 年）について，土木史研究，18

朝比奈美砂子，2008，永遠なれ　本丸御殿　名古屋城特別展　失われた国宝　名古屋城本丸御殿―創建・戦火・そして復元，132-141p

盆野行輝，2016，宝永・安政地震の城郭被害～志摩国鳥羽城を中心に，歴史地震，31，89-103p

盆野行輝，2018，安政伊賀上野地震の城郭被害，歴史地震，33，103-120p

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所文化遺産部遺跡整備研究室，2017，近世城跡の近現代―平成 28 年度　遺跡整備・活用研究集会報告書

藤井譲治，1990，大名城郭普請許可制について，人文學報，81-100p

地震調査研究推進本部地震調査委員会，2009，日本の地震活動―被害地震から見た地域別の特徴―第 2 版，428-431p，地震調査研究推進本部 HP　https://www. jishin. go. jp/resource/seismicity_japan/

城郭談話会，2019，城郭談話会特別例会　存城・廃城（いわゆる廃城令）から明治中期における城郭―その軍事・保存・改変―

嘉村哲也・木下泰葉・下高大輔・関根章義，2019，熊本城の江戸期修復石垣の様相―彦根城と仙台城の比較から修復石垣の変遷を考える―，熊本城調査研究センター年報，5，115-134p

城戸久，1960，江戸幕府の諸侯城郭に対する政策について，日本城郭全集　第二巻　近世の城・概論，日本城郭協会出版部

北原糸子, 2015, 宝永地震と大名手伝普請－駿府城石垣修築を中心に－, 千葉史学, 66, 34-66p
熊本城調査研究センター, 2019, 特別史跡熊本城跡総括報告書 歴史資料編 史料・解説
熊本県教育委員会, 1999, 冨重写真所資料調査報告書
熊本市・熊本日日新聞, 2019, 復興熊本城 Vol.3 天守復興編Ⅱ 令和元年度上半期まで, 54-55p
森山英一, 1970, 名城と維新―維新とその後の城郭史―, 日本城郭資料館出版会
室谷智子・有賀暢迪・若林文高・大迫正弘, 2016, 国立科学博物館に残る 1889 年(明治 22 年)明治熊本地震の資料, 国立科学博物館研究報告 E 類(理工学) , 39, 89-96p
大江志乃夫, 2018, 日本の参謀本部, 吉川弘文館, 66p
白石烈, 2015, 明治・大正両時代の『御手許写真』と明治天皇御手許書類, 明治天皇 邦を知り国を治める―近代の国見と天皇のまなざし, 宮内庁, 83-87p
白石烈, 2016, 明治・大正時代御手許写真の来歴, 書陵部紀要, 67
白峰旬, 1998, 日本近世城郭史の研究, 校倉書房
高田徹, 2019, 趣旨説明, 城郭談話会特別例会 存城・廃城(いわゆる廃城令)から明治中期における城郭―その軍事・保存・改変―
山中進, 1996, 明治二十二年熊本大地震の記録, 市史研究くまもと(のち, 山中進・鈴木康夫編, 2015, 熊本の地域研究, 成文堂 に補筆し所収)
山中佳子・新井田倫子, 2018, 明治 22 年熊本地震の詳細震度分布, 地震 第2輯, 70, 233～248p

史料

『法令全書 明治 21 年』国立国会図書館デジタルコレクション http://dl. ndl. go. jp/info:ndljp/pid/787973/100
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C10060173400, 明治22年『編冊 各監督部 陸軍省』(防衛省防衛研究所)
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C07070382600 明治22年『肆大日記 8月』(防衛省防衛研究所)
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C07050216000 明治23年『伍大日記 2月』(防衛省防衛研究所)
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C10060173500『明治 22 年 編冊 各監督部 陸軍省』(防衛省防衛研究所)
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C07050188900, 明治 22 年『伍大日記 12 月』(防衛省防衛研究所)
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C07050188800, 明治 22 年『伍大日記 12 月』(防衛省防衛研究所)
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C10060173700, 明治22年『編冊 各監督部 陸軍省』(防衛省防衛研究所)
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C06080899500 明治 22 年『貳大日記 11 月』(防衛省防衛研究所)
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C06080914500 明治 22 年『貳大日記 12 月』(防衛省防衛研究所)
JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. C06080920600 明治 22 年『貳大日記 12 月』(防衛省防衛研究所)
JACAR（アジア歴史史料センター）Ref. C06081072500 明治23年『貳大日記 3月』(防衛省防衛研究所)
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C06081077400 明治23年『貳大日記 3月』(防衛省防衛研究所)
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C07050268800 明治23年『伍大日記 8月』(防衛省防衛研究所)
『熊本福岡二縣震災視察復命書』(個人蔵) 新熊本市史編纂委員会編, 1997, 新熊本市史 史料編 第六巻 近代Ⅰ所収
『熊本新聞』明治22年10月2日付(熊本市歴史文書資料室)
『九州日日新聞』明治22年8月4日付(熊本市歴史文書資料室)
『九州日日新聞』明治22年8月11日付(熊本市歴史文書資料室)
『明治廿二年熊本縣大震始末』(熊本県立図書館, 熊本県公文類纂 23-15)

水島貫之, 1889,『熊本明治震災日記』 国立国会図書館デジタルコレクション http://dl. ndl. go. jp/info:ndljp/pid/766612/1
臨時帝室編修局,『明治天皇内廷御書類目録 件名目録第三種』(宮内公文書館, 識別番号 37210)
『歳計決算報告書 明治二十二・二十三年度』国立国会図書館デジタルコレクション http://dl. ndl. go. jp/info:ndljp/pid/799755
『震災ニ関スル諸報告』(宮内公文書館, 識別番号 50272)

表 1 明治熊本地震による第六師団の対応の経過

Table 1. The cource of the 6th Division's response after the Meiji Kumamoto Earthquake

年	月	日	内容	出典
1889	7	28	**23時35分頃　地震発生（推定マグニチュード6.3）**	
	7	29	午前3時　城内石垣・兵営の被害について第1報を陸軍省が受信	『明治22年　編冊　各監督部　陸軍省』
	7	30	富小路敬直（侍従）と荻昌吉（非職侍従）の熊本・福岡両県派遣決定	『熊本福岡二縣震災視察復命書』
			熊本城内の石垣被害について新聞で報じられる	7/30付『九州日日新聞』
	7	31	第六師団井出監督部長,被害の概況について大山陸軍大臣へ別冊を提出	明治23年『伍大日記　2月』
			石垣被害のため不開門以外の通行禁止	7/31付『九州日日新聞』
			城内の兵営と石垣の被害について熊本新聞社社員の実見報告を掲載	7/31付『九州日日新聞』
	8	1	両侍従,東京を出発	『熊本福岡二縣震災視察復命書』
	8	2	福岡県尋常師範学校修学旅行の生徒一同,第六師団内を一覧し宇土櫓に登る	8/3付『九州日日新聞』
	8	3	**午前2時10分　強い余震発生** 午前10時45分,西出丸の櫓（武庫・火薬庫に利用）が石垣とともに崩壊したことを井出監督部長より大山陸軍大臣に報告	『明治22年　編冊　各監督部　陸軍省』
	8	4	師団内の破損が新聞で報じられる　<u>城内石垣崩壊29か所,孕み出し14か所,崖崩壊5か所</u>	8/4付『九州日日新聞』 8/4付『熊本新聞』
	8	5	不開門の石垣,崩壊の危険のため押し崩す	8/6付『九州日日新聞』
	8	5	3日の余震で倒壊した櫓の片付け	8/6付『熊本新聞』
	8	6	両侍従,午前8時三角港着.午後,熊本県庁・第六師団を訪問	『熊本福岡二縣震災視察復命書』
	8	7	両侍従,飽田郡高橋町・小島町,熊本市京町・坪井町,飽田郡黒髪村を視察	『熊本福岡二縣震災視察復命書』
	8	8	両侍従,玉名郡高瀬町を視察後,午後3時に福岡県に出発	『熊本福岡二縣震災視察復命書』
	8	9	第六師団兵営・城郭の修繕費概算は17万円以上に達するだろうと報じられる	8/9付『九州日日新聞』
	8	11	長崎港にて熊本県職員が富小路侍従に被害地写真11枚を進上	『明治廿二年熊本縣大震始末』
	8	12	17時,両侍従長崎港を出発	『熊本福岡二縣震災視察復命書』
	8	17	第六師団,7/31に提出した破損所取調書は漏れが多かったため別冊を提出し,差し替えを願う	明治22年『伍大日記　2月』
	8	18	両侍従,帰京.視察結果を復命	『熊本福岡二縣震災視察復命書』
	8	19	城郭修築保存の概算金7万3500余円.第六師団,陸軍大臣に修築費用の下付と保存修築の計画作成を請う	明治22年『伍大日記　12月』
	8	23	第六師団,兵営・病院・兵器弾薬庫等の臨時修繕費として2万6213円90銭の支出を請う	明治22年『伍大日記　12月』
			急場の費用として繰り替えた経常費1470余円の経常費へ戻し入れは追って申請する旨,第六師団より上申	『明治22年　編冊　各監督部　陸軍省』
	8	24	熊本県に明治天皇から1,000円,皇后から300円の恩賜金下賜が決定	『明治天皇紀』
	9	10	熊本城及び兵営の修繕費10万7583円39銭を要するため,臨時に別途下付について大蔵大臣との協議を要請	明治22年『弐大日記　11月』
	9	26	松方大蔵大臣より大山陸軍大臣へ,兵営廨舎修繕として経常費3万4032円85銭を下付し,建物修繕に伴って石垣改修をする場合は経常費から支弁するよう回答	明治22年『弐大日記　11月』
	9	27	熊本県職員出張し,内務省へ増写した11枚の被害地写真提出 富小路侍従へ増写した被害地写真9通り（1通り22枚）を提出	『明治廿二年熊本縣大震始末』
	10	2	石垣の修理を請け負う石工がいないという噂を新聞が報じる	10/2付『熊本新聞』
	12	4	熊本城の石垣修繕に要する費用を会計局供用金の内から増額	明治22年「貳大日記　12月」
	12	9	8/19の城郭修築保存伺について,本年度において9787円52銭6厘を増額し,緊急の修繕をするよう陸軍省より第六師団へ通知	明治22年『伍大日記　12月』
			8/23の臨時修繕費下付の伺について,陸軍省より第六師団へ伺の通りと回答	明治22年『伍大日記　12月』
	12	16	明治22年度4～9月分の陸軍経費（経常・臨時歳出）一覧表の進達	明治22年『貳大日記　12月』
	12	25	第六師団監督部及外官廨舎は千葉城に移転し,その費用は熊本兵営廨舎震災修繕金3万4032円85銭から支弁する旨伺う	明治23年『伍大日記　2月』
1890	3	1	明治22年度10～12月分の陸軍経費（経常・臨時歳出）一覧表の進達（臨時歳出として「熊本兵営廨舎震災修繕」3万4032円85銭と記載）	明治23年『貳大日記　3月』
	3	25	明治22年度1月分の陸軍経費一覧表進達	明治23年『貳大日記　3月』

表 2『震災ニ関スル諸報告』の構成

Table 2. Composition of various reports of the Meiji Kumamoto Earthquake

	表題	作成	丁数	作成日	備考
1	震災ニ関スル諸報告	第六師団軍医部	3	8月7日	第六師団罫紙
2	明治廿二年七月廿八年震災ノ為メ負傷人員	歩兵第十三聯隊	1	—	歩兵第拾三聯隊罫紙
3	明治廿二年七月廿八日震災ノ為メ負傷人員	歩兵第廿三聯隊	1	—	歩兵第二十三聯隊罫紙
4	明治二十二年七月廿八日震災前后気圧及地底水調査表	熊本衛戍病院	1	—	第六師団罫紙
5	明治廿二年七月廿八日震災ニ付治療器械破損員数表	歩兵第十三聯隊	1	8月6日	歩兵第拾三聯隊罫紙
6	明治二十二年七月廿八日震災ニ付破損器械取調表	野戦砲兵第六聯隊	1	—	砲兵第六聯隊罫紙
7	明治廿二年七月廿八日震災ニ付治療器械破損取調表	輜重兵第六大隊	1	—	輜重兵第六大隊罫紙
8	明治廿二年七月廿八日震災ニ付破損器械取調表	熊本衛戍監獄	1	—	第六師団罫紙
9	明治廿二年七月廿八日震災ニ付破損器械調査表	(熊本衛戍病院ヵ)	2	—	第六師団罫紙
10	明治廿二年七月廿八日震災ニ付損失物調査表	歩兵第十三聯隊	1	8月6日	歩兵第拾三聯隊罫紙
11	明治廿二年七月廿八日震災ニ付損失薬物取調表	歩兵第廿三聯隊	2	—	歩兵第二十三聯隊罫紙
12	明治廿二年七月廿八日震災ニ付損失薬物取調表	野戦砲兵第六聯隊	1	—	砲兵第六聯隊罫紙
13	明治廿二年七月廿八日震災ニ付損失薬物取調表	輜重兵第六大隊	1	—	輜重兵第六大隊罫紙
14	明治廿二年七月廿八日震災ニ付損失薬物取調表	熊本衛戍監獄	1	—	第六師団罫紙
15	明治廿二年七月廿八日震災ニ付損失薬物取調表	熊本衛戍病院	5	8月1日	第六師団罫紙
16	明治二十二年七月二十八日午後十一時三十五分震災破損所概調書	第六師団監督部	14	(8月3日以降)	第六師団監督部罫紙 裏表紙に「第六師団監督部之印」の割印あり
17	震災破損所概調書付録	第六師団監督部	4	(8月3日以降)	第六師団監督部罫紙 末尾に「熊本城　千弐百分一図」あり 裏表紙に「第六師団監督部之印」の割印あり

表 4　第六師団経費一覧表

Table 4. Expense list of the 6th Division

		4～9月			10～12月			1月		
	費目	現予算額	仕払額	差引残額	現予算額	仕払額	差引残額	現予算額	仕払額	差引残額
経常歳出	俸給及諸給	522,022円25銭1厘	232,451円07銭7厘	289,351円17銭4厘	522,022円25銭1厘	362,892円48銭8厘	159,109円76銭3厘	522,002円25銭1厘	404,132円98銭2厘	117, 869円26銭9厘
	廳費	62,354円67銭7厘	21,898円71銭6厘	40,455円96銭1厘	62,669円58銭3厘	39,802円95銭2厘	22,866円63銭1厘	62,669円58銭3厘	45,689円64銭8厘	16,979円93銭5厘
	旅費	29,088円32銭4厘	15,616円26銭4厘	13,472円06銭	29,488円20銭	25,064円91銭6厘	4,423円28銭4厘	30,030円47銭2厘	27,959円15銭1厘	2,071円32銭1厘
	営繕費	79,810円32銭9厘	23,914円84銭3厘	55,895円48銭6厘	90,179円95銭	47,680円16円1厘	43,039円78銭9厘	90,719円95銭	47,375円52銭2厘	43,344円42銭8厘
	機密費	17円	0	17円	17円	36銭	16円64銭	17円	36銭	16円64銭
	兵器弾薬費	11,363円89銭1厘	2,900円67銭9厘	8,663円21銭2厘	10,976円93銭	6,550円67銭	4,426円26銭	10,976円93銭	7,711円46銭3厘	3,265円46銭7厘
	糧食費	226,571円91銭9厘	83,654円16銭5厘	142,917円75銭4厘	226,571円91銭9厘	142,031円18銭5厘	84,540円73銭4厘	226,571円91銭9厘	152,097円33銭8厘	74,474円58銭1厘
	被服費	138,446円91銭4厘	79,547円15銭4厘	58,899円76銭	139,269円43厘3厘	113,902円11銭8厘	25,367円31銭5厘	139,269円43銭3厘	130,381円32銭6厘	8,888円10銭7厘
	馬匹費	56,994円73銭3厘	17,378円18銭4厘	39,616円54銭9厘	54,904円73厘3厘	36,276円52銭8厘	18,628円20銭5厘	54,904円73銭3厘	37,557円68銭9厘	17,347円04銭4厘
	治療費	5,148円83銭6厘	2,351円07銭5厘	2,797円76銭1厘	5,148円83銭6厘	3,643円53銭7厘	1,505円27銭9厘	5,148円83銭6厘	3,826円69銭1厘	1,322円14銭5厘
	測量費	–	–	–	–	–	–	–	–	–
	演習及復習費	59,068円58銭7厘	29,011円91銭5厘	30,056円67銭2厘	59,068円58銭7厘	40,087円52銭7厘	18,981円6銭	59,068円58銭7厘	44,141円63銭2厘	14,926円95銭5厘
	供奉費	–	–	–	–	–	–	–	–	–
	罷役恤費	–	–	–	–	–	–	–	–	–
	監獄費	4,063円	1,233円83銭3厘	2,829円16銭7厘	4,063円	1,891円41銭9厘	2,171円58銭1厘	4,063円	2,027円77銭2厘	2,035円22銭8厘
	賠償金	–	–	–	–	–	–	–	–	–
	計	1,193,130円46銭1厘	509,957円90銭5厘	685,172円55銭6厘	1,204,900円42銭2厘	819,823円88銭1厘	385,076円54銭1厘	1,205,442円69銭4厘	902,901円57銭4厘	302,541円12銭
臨時歳出	熊本騎兵営新築	48,633円50銭	28,186円98銭2厘	20,446円51銭8厘	48,633円50銭	48,627円75銭5厘	5円74銭5厘	48,633円50銭	48,627円75銭5厘	5円74銭5厘
	熊本兵営廠舎震災修繕	–	–	–	34,032円85銭	1,852円32銭	32,180円53銭	34,032円85銭	6,382円90銭6厘	27,649円94銭4厘
	計	48,633円50銭	28,186円98銭2厘	20,446円51銭8厘	82,666円35銭	50,480円7銭5厘	32,186円27銭5厘	82,666円35銭	55,010円66銭1厘	27,655円68銭9厘

「明治二十二年度　明治二十二年自四月至九月　陸軍経費一覧表」　JACAR(アジア歴史資料センター) Ref:C06080920600　明治22年「貳大日記　12月」、
「明治二十二年度　明治二十二年自十月至12月　陸軍経費一覧表」　JACAR（アジア歴史史料センター）Ref：C06081072500　明治23年「貳大日記　3月」、
「明治二十二年度　明治二十三年一月　陸軍経費一覧表」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref:C06081077400　明治23年「貳大日記　3月」より作成

表 3 明治熊本地震による熊本城の被災箇所

Table 3. Damaged areas in the Kumamoto Castle during the Meiji Kumamoto Earthquake

図中番号	被害内容	被害規模				地　　点※2	地震後の修理の有無※3
		長さ	高さ	坪	㎡※1		
1	石垣破壊	20間	5間	100	330	旧細川刑部邸西側石垣	○
2	石垣孕ミ出シ	7間	5間	35	115.5	二の丸御門西側石塁外面	○
3	石垣破壊	15間	5間	75	247.5	同上	○
4	石垣孕ミ出シ	8間	4間	32	105.6	二の丸御門南西石垣	○
5	石垣孕ミ出シ	14間	2間半	35	115.5	二の丸御門北側石塁内面	○
6	石垣孕ミ出シ	19間	5間半	104.5	344.85	二の丸御門東石垣	○
7	石垣破壊	10間	3間半	35	115.5	百間石垣西端	○
8	石垣孕ミ出シ	50間	6間半	325	1072.5	百間石垣	○
9	石垣孕ミ出シ	6間	2間	12	39.6	監物櫓南西石垣	○
10	石垣孕ミ出シ	33間	3間	99	326.7	二の丸西端石垣	○
11	石垣孕ミ出シ	4間	3間	12	39.6	長岡預櫓台	○
12	石垣孕ミ出シ	8間	5間半	44	145.2	長岡預櫓南側石垣	○
13	崖破壊	20間	8間	160	528	二の丸南西隅切岸	不明※4
14	崖破壊	6間	4間	24	79.2	古城北西隅切岸	不明※4
15	崖破壊	12間	6間	72	237.6	古城北西隅切岸	不明※4
16	石垣孕ミ出シ	1間5分	1間8分	2.7	8.91	古城正面口虎口石塁	○
17	石垣破壊	8間	2間	16	52.8	古城正面古城橋袂石垣	○
18	石垣孕ミ出シ	16間	2間半	40	132	古城正面口虎口石塁	○石塁部撤去
19	石垣破壊	6間	1間半	9	29.7	古城正面口東石垣	○
20	崖破壊	5間	5間	25	82.5	奉行丸東空堀西切岸	不明※4
21	崖破壊	5間	6間	30	99	西出丸空堀西切岸	不明※4
22	崖破壊	6間	4間	24	79.2	西出丸東切岸	不明※4
23	石垣破壊	3間	3間	6	19.8	西出丸北側石塁　階段部	○
24	石垣破壊	4間	2間	8	26.4	西出丸北側石塁　階段部	○
25	石垣破壊	12間半	3間	37.5	123.75	北大手門南側石塁内面	○
26	石垣破壊	5間	2間半	11.5	37.95	北大手門東側石塁外面	○
27	石垣孕ミ出シ	26間	2間3分	59.8	197.34	櫨方北側石塁外面（西方）	○
28	石垣破壊	17間	4間半	76.5	252.45	櫨方北側石塁外面（東方）	○
29	石垣孕ミ出シ	33間	2間半	80	264	櫨方北側石塁内面（両側）	○上部省略
30	石垣破壊	4間	2間5分	10	33	櫨方北側石塁内面（中央）	○上部省略
31	石垣破壊	29間	2間半	72.5	239.25	西大手門南石塁内・外面	○上部省略
32	石垣孕ミ出シ	4間	1間半	6	19.8	西大手門東石塁北面	○上部省略
33	崖破壊	8間	6間	48	158.4	頬当御門南空堀西切岸	不明※4
34	石垣破壊	37間	2間半	59.4	196.02	南大手門東櫓台北・西・南面	○石塁部撤去
35	石垣破壊	4間	2間	8	26.4	南大手門西櫓台南階段	○
36	石垣孕ミ出シ	16間	3間	48	158.4	奉行丸東石垣南隅	○
37	石垣破壊	14間	6間	74	244.2	奉行丸南石垣東隅	○上部省略
38	石垣破壊	15間	3間	45	148.5	数寄屋丸御門石塁北・内面	○
39	石垣破壊	5間	1間6分	8	26.4	数寄屋丸御門南石垣	○
40	石垣孕ミ出シ	16間	6間4分	102.4	337.92	宇土櫓続櫓南石垣	○
41	石垣破壊	30間	3間8分	114	376.2	数寄屋丸御門東石垣	○上部省略
42	石垣破壊	6間	1間3分	7.8	25.74	平左衛門丸北石塁内面	○
43	石垣破壊	6間4分	1間5分	9.6	31.68	御肴部屋櫓台南面	○
44	石垣破壊	2間	3間	6	19.8	小天守穴蔵西内面	○上部省略、焼損石を新材に転換
45	石垣破壊	3間	3間	9	29.7	小天守玄関北側石垣	○上部省略、焼損石を新材に転換
46	石垣破壊	8間	3間	24	79.2	小天守玄関南側石垣	○
47	石垣破壊	6間	8間	4.8	15.84	トキ御櫓東石塁外面	○
48	石垣破壊	4間	3間	12	39.6	不開門北脇石垣	○
49	石垣破壊	9間	1間半	10.5	34.65	大天守穴蔵北内面	○焼損石を新材に転換
50	石垣破壊	3間	1間半	4.5	14.85	大天守穴蔵玄関口北側	○焼損石を新材に転換
51	石垣孕ミ出シ	14間	5間	70	231	数寄屋丸五階櫓台南面	○
52	石垣破壊	28間	2間	56	184.8	耕作櫓門西櫓台東・北・西面	○
53	石垣破壊	16間	2間	32	105.6	天守方廊下石塁	○
54	石垣破壊	1間	2間	2	6.6	闇御門東石垣	○焼損石・新材使用
55	石垣破壊	2間	1間	2	6.6	闇通路南面石垣	○焼損石を新材に転換
56	石垣破壊	10間	2間2分	22	72.6	闇通路四辻北・西側石垣	○焼損石を新材に転換
57	石垣破壊	1間半	2間	3	9.9	闇通路四辻南・西側石垣	○焼損石を新材に転換
58	石垣孕ミ出シ	10間	1間7分	17	56.1	闇通路四辻北・東側石垣	○焼損石を新材に転換
59	石垣破壊	6間	2間5分	13.8	45.54	闇通路四辻東・北側石垣	○焼損石を新材に転換
60	石垣孕ミ出シ	6間	4間	24	79.2	東三階櫓台北面	○修理箇所未確認
61	石垣破壊	8間	2間	16	52.8	西櫓門口南石塁（石門）内面	○
62	石垣破壊	4間	1間	4	13.2	東竹の丸西口北側石塁内面	○
63	石垣破壊	14間	4間半	64	211.2	飯田丸五階櫓台西・南・東面石垣	○
64	石垣破壊	15間	3間半	52.5	173.25	要人櫓台南面石垣	○一部で上部省略
65	石垣破壊	15間	3間	45	148.5	飯田丸南石垣	○
66	石垣破壊	6間	3間3分	19.8	65.34	山崎口北側南面石垣	○
67	石垣破壊	9間	4間半	40.5	133.65	馬具櫓台南面石垣	○
68	石垣孕ミ出シ	90間	3間	270	891	竹の丸南（長塀）石垣	○
69	石垣破壊	10間	3間半	35	115.5	竹の丸南（長塀）石垣中央	○

『震災ニ関スル諸報告』（宮内公文書館蔵、識別番号50272）より作成

※1　１坪を3.3㎡で計算した

※2　現在の呼称などから作成者が付した

※3　肉眼での現地観察による.なお,『震災ニ関スル諸報告』に記載の規模よりも修復範囲は広く,孕み出し箇所も修復されている

※4　崖破壊箇所には現在石垣による擁壁があるが,明治熊本地震後によるものか特定が進んでいないため不明としている

図２『震災ニ関スル諸報告』付属の熊本城被害図（赤色は「石垣及崖破壊」，黄色は「石垣孕ミ出シ」を示す）．

Fig. 2 Map of the damaged areas in the Kumamoto Castle

(contained within “the Various reports of the Meiji Kumamoto Earthquake”)

図 3　現在の特別史跡熊本城跡配置図（本丸中心部）

Fig.3 The Map of the Kumamoto Castle Ruins(a part of Honmaru)

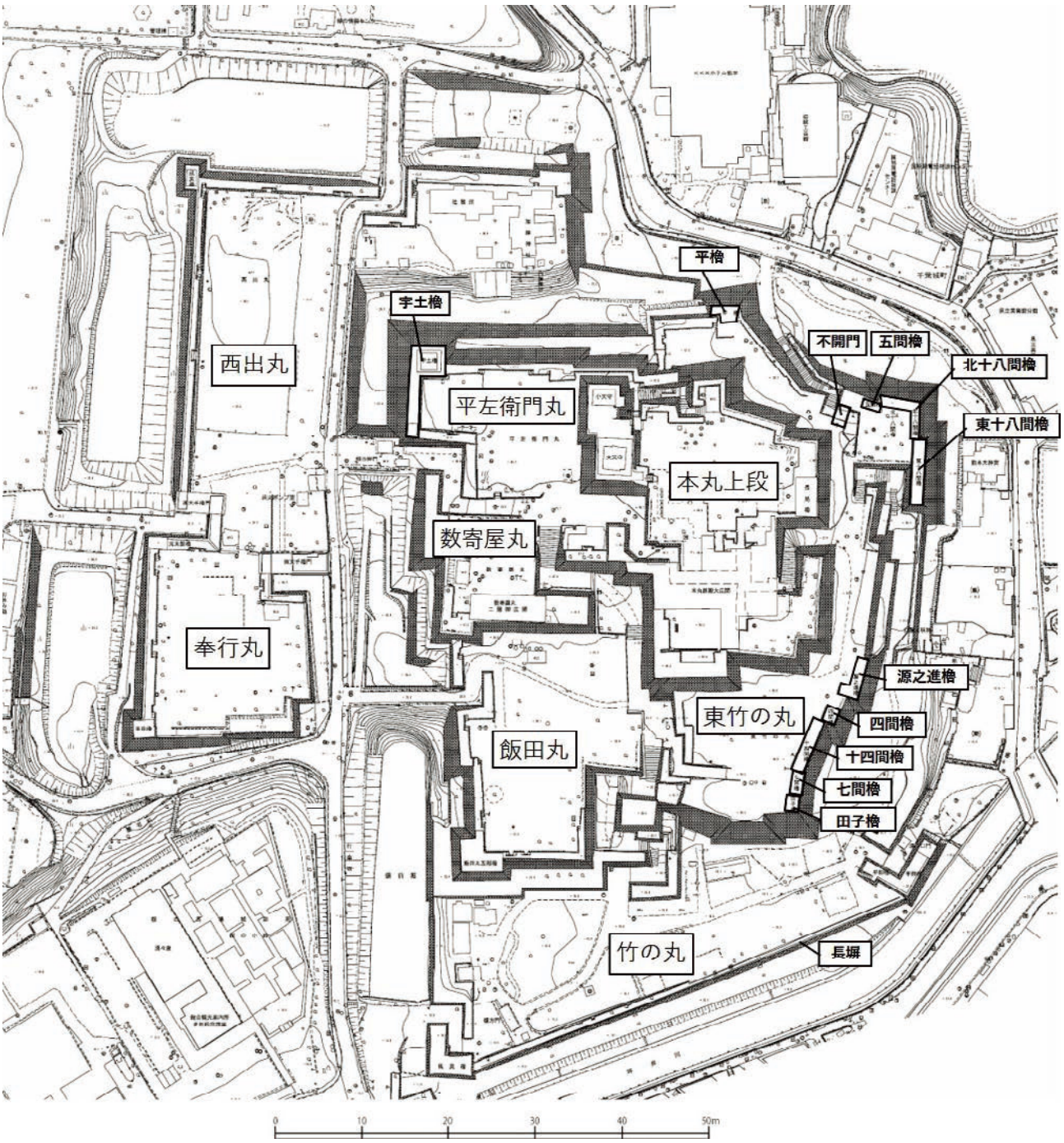

図 4 旧熊本城西出丸　第六師団火薬庫崩壊之景(国立科学博物館蔵).

Fig. 4　A photograph of damaged 6th Division Gumpowder at Nishidemaru (owned by National Museum of Nature and Science)

図 5 熊本城被害図(西出丸部分拡大).
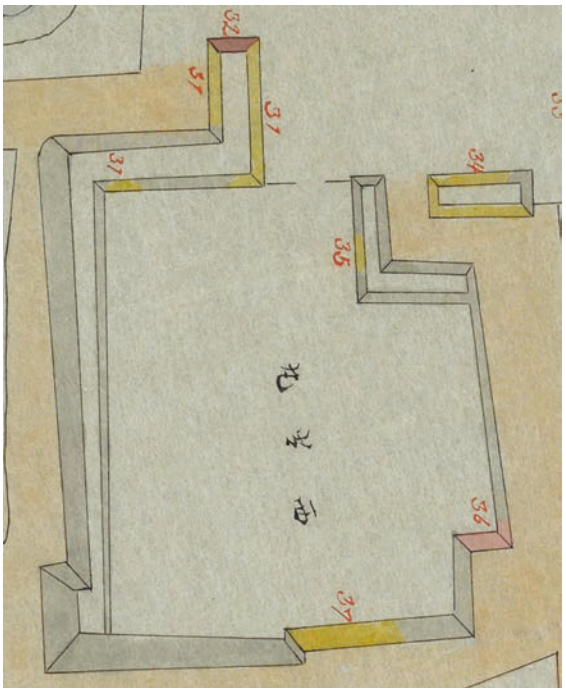
Fig. 5 Map of the damaged areas in the Kumamoto Castle (enlarges a part of Nishidemaru)